
「こよみ」と「くらし」

— 第三世界の労働リズム —

小島 麗逸
大岩川 嫩

編

アジアを見る眼

73

1987年3月

2 タイの暦法と干支

末廣 昭

仏暦と西暦

タイでは現在、公文書をはじめ、法律でも日常会話でも仏暦を使っている。西暦を使うのは外国に提出する英文報告書くらいで、あとはすべて仏暦である。仏暦というのは、釈迦が入滅した年を元年とする小乗仏教国の暦年で、西暦に五四三年を足すとその数字を求めることができる（たとえば西暦一九八七年は仏暦二五三〇年）。

しかし西暦に五四三年を加えたものが仏暦と完全に一致するのは、実はタイ政府が新年の開始日を四月一日から一月一日に変更した一九四一年以降のことである。一九四一年以前の場合には、たとえば仏暦二四七三年は西暦一九三〇年を示すのではなく、一九三〇年四月一日から三一年三月三十一日までの一年間を指していることに注意する必要がある。戦前タイの統計年鑑の類が、仏暦二四七三年の英訳として一九三〇／三一年を充てているのも、そのためである。

多種多様の暦

タイで使われてきた暦年（サツカライト）は、実は仏暦だけではない。過去に遡ると主なものだけでも五つを数える。古い順に掲げておくと、(1)大暦（マハ

II 東南アジア

| インドの月 | ヒンディー語 | タイ語 | タイの月 |
|-------|--------|---------|------|
| 第一月 | チャイトラ | チットラ | 五月 |
| 第二月 | ヴァイサーク | ウイサーカ | 六月 |
| 第三月 | ジェトウ | チエータ | 七月 |
| 第四月 | アサール | アーサータ | 八月 |
| 第五月 | サヴァン | サーワナ | 九月 |
| 第六月 | バードー | パットラポット | 十月 |
| 第七月 | アスウイン | アツサユット | 十一月 |
| 第八月 | カーテイク | ガテイカ | 十二月 |
| 第九月 | アガハーン | ミツカシラ | 一月 |
| 第十月 | プス | ブツサヤ | 二月 |
| 第十一月 | マーグ | マーカ | 三月 |
| 第十二月 | ファーン | パクナ | 四月 |

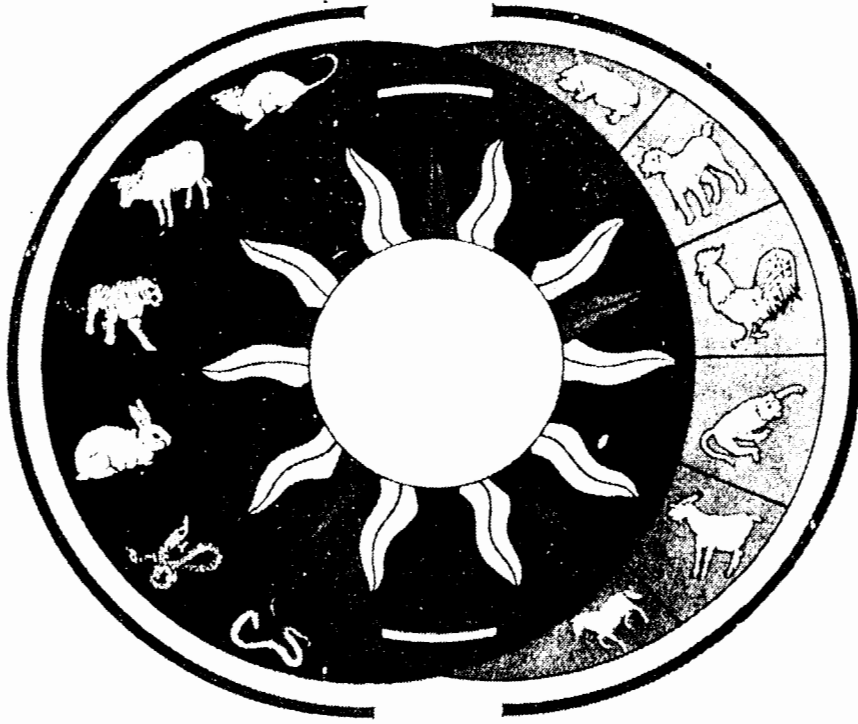
(注) タイにおける太陰太陽暦の各月の呼称は、中国の28宿のインドにおける呼び方を借用したもので、その中から12宿をとったものである。ただし、インドにおける第1の月(チャイトラ)は、タイでは5月(ドウアン・ハア)になる。閏月としては19年に7回の割で8月を2回重ねる。

ー・サツカラート)、(2)小暦(チュンラ・サツカラート)、(3)仏暦(プッタ・サツカラート)、(4)ラッタナコーシン暦(ラッタナコーシン・ソック)、そして使用時期がよくわからないが、昔の法律集に登場する、(5)チュラーマニー暦(大暦から一一〇年を差し引いたもの)がそれである。

太陰太陽暦十二月のタイ語呼称

このうち大暦、小暦はインドの太陰太陽暦に由来するもので、大暦は西暦七八年、小暦は西暦六三八/九年をそれぞれ紀元元年とする。小暦の使用開始は、スコタイ朝期(十三世紀末)ともアユタヤ朝期(十六世紀末頃)とも言われるが、宗教暦としての仏暦とは別に、アユタヤ朝後期以降公用暦として使用されてきたことは、事実である。

公用暦としての小暦は、一八八九年ラーマー五世



十二支が描かれたタイの暦の表紙

もうひとつは「十干」で、これは甲、乙、丙…と呼ぶのではなく、甲は第一年（エーカ・ソック）と呼び、以下第二年（トー・ソック）、第三年（トゥリー・ソック）と続き、第十年（サムルッティ・ソック）で終わって、再びエーカ・ソックに戻る。エーク以下の年の数え方は、サンスクリット語

に由来する序列を示す特別のタイ語で、今でも軍や警察の階級、学位（学士、修士、博士）など、一部に使われている。

「千支」で重要なことは、「十干」（ソック）の第一年、第二年が小暦の数字に一致していた（あるいはさせていた）、ことである。たとえば小暦一二三八年は第八年ネズミ年、一二四〇年は第十年トラ年というように、小暦の末尾の数字が「十干」の年に一致していた。

したがって当時の政府は、布告や年代記にあえて小暦を明記する必要はなかったものと思われる。一方、一般の人々にとっても、自分の年齢を数えたり、周りの人々との老若の差を確認したり、あるいは重要な事件を記憶するためには、「千支」さえ知っている

れば十分であつた。「干支」が一巡する六十年を越えて生きる人々は当時少なかつたし、仮に生き延びても、還暦を経験すれば、それは生まれ替わりの人生を意味したからである。

ピー・マイ（新年）とソック・マイ（新年）

タイで厄介なのは、新年の定義である。現在タイでは、暦の上の新年は一月一日で、この日は祝日となっている。しかし、タイ人に「タイの新年はいつですか」と聞けば、十人が十人とも四月十三日十五日のソックラーン祭がそうだと答えるであろう。つまりタイ人には、新年は二つあり、これは昔から

そうであつた。

もともとタイでは、一年の月日を測る際に、月の満ち欠けとは別に太陽の運行にもとづく測り方が存在した。すなわち楕円状の天体を黄道沿いに十二の宮（ラーシー、星座に相当）に分け、太陽がひとつの宮を通過する時間を一カ月とみなすやり方がそれである。そのためタイにおける十カ月の呼称は、すべてがパーリー語またはサンスクリット語の星座の名からきている。

たとえばタイの七月はガラツカダーコムであるが、これはサンスクリット語のゴーラゴット（カニ）とアーコム（到着する）の合成語で、巨蟹宮を意味する。同じく八月はシンハーコム（シン（獅子）＋アーコム（到着する）、獅子宮）、九月はガンヤーヨン（ガンヤー（乙女）＋アーコム（到着する）、処女宮）を意味した。なおアーコムは三十一日の月に、アーヨンは三十日の月に入る時にそれぞれ使われる（左表参照）。

ところでタイでは、太陽がひとつの宮から次の宮へ移る時をソックラーンと呼び慣わし、とり

太陽曆十二月のタイ語呼称

| 月 | タイ語呼称 | パーリー語・サンスクリット語合成 | 十二宮 |
|-----|-----------|-------------------|-----|
| 一月 | モツカラークム | マゴン(海蛇)+アークム | 磨羯宮 |
| 二月 | グムパーパン | グム(パ)(水瓶) | 宝瓶宮 |
| 三月 | ミーナーコム | ミーン(魚)+アークム | 双魚宮 |
| 四月 | メーサーヨン | メーサ(羊)+アークム | 白羊宮 |
| 五月 | プルツサパークム | プルツサパ(牛)+アークム | 金牛宮 |
| 六月 | ミトウナーヨン | ミトウン(双児)+アークム | 双児宮 |
| 七月 | ガラツカダークム | ゴラゴット(カニ)+アークム | 巨蟹宮 |
| 八月 | シンハーコム | シン(獅子)+アークム | 獅子宮 |
| 九月 | ガンヤーヨン | ガンヤー(乙女)+アークム | 処女宮 |
| 十月 | トウラーコム | トウラー(秤)+アークム | 天秤宮 |
| 十一月 | プルツサチガーヨン | プルツサチック(サソリ)+アークム | 天蠍宮 |
| 十二月 | タンワーコム | ターヌ(弓矢)+アークム | 人馬宮 |

わけ双魚宮から白羊宮へ移る時を大ソクラーンと呼んで、これを事の始まりとした。この大ソクラーンが実はタイ本来の新年であり、考え方は日本の立春正月とまったく同じである。

ところが、小曆を公用曆として使っていた当時の曆上の新年は、陰曆の第五月白月の一日目であった。他方、ソクラーン祭は古くから陽曆四月十三、十五日と決まっている。陰曆は一年を

三五四日に数えるから、当然曆上の新年は陽曆の四月十三、十五日とは一致しない。

事実当時のタイでは、十二支（ピー）とトシは陰曆五月一日に変わり、十干・小曆（ソック）の曆年のほうはソックラーン祭をもって変わる、という方法がとられた。つまり二つの「新年」である。

ただこの二つの新年は、一八八九年にラーマー五世王がラッタナコーシン曆を新たに採用した時に、形式上は統一されることになった。すなわち、曆上の新年を陰曆第五月白月の一日から陽曆四月一日に変え、この日をもってトシも曆年もあらたまるとしたからである。この点は一九四一年に、今日のように曆上の新年を陽曆の四月一日から一月一日に変えた時も同じであった。

しかしタイ人にとっての新年はやはりソックラーン祭である。お上の決めた新年と人々の新年の二つが、今なお存在することも変わりはない。もっとも筆者のようにタイの経済史を勉強する者には、「新年」が直ちに国際比較のできる一月一日に統一されたことは、統計や年代記を整理する上で、すこぶる便利ではあるが。

（すえひろ あきら／アジア経済研究所調査研究部）